

第 66 回国際理解・国際協力・多文化共生のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 銀賞

お茶の水女子大学附属中学校 2 年

山田 真緒

課題 ②

世界中で争いや分断が深まる今日、国連は必要だと思うか。

副題

大戦の記憶と世界平和の誓い

本文

②大戦の記憶と世界平和の誓い

国連は、一九四五年、第二次世界大戦への大きな反省から創設された。戦争によって世界は地獄と化すことを人類は思い知り、将来の戦争を防止するため、国々が協力し合うための世界的組織が必要と考えたのだ。私は、この国連誕生の経緯こそが、今日も国連が必要であることを示していると考えてる。

今年は戦後八十一年、今日の世界の指導者達は第二次世界大戦の悲惨さを知らない世代であり、その指導者達のもとして世界の争いや分断が深まっている。この現状に、私の祖母は、「とても危うい感じがする。何かのきっかけで、またあの過ちを繰り返してしまうのではないか」と言う。私の祖母は、国民学校(現在の小学校)五年生で終戦を迎えた。一年生の十二月から五年生の八月まで、約四年間、戦争の中で育った。ウクライナの人々の惨状が四年を超えたというニュースと一緒に見たとき、祖母は真剣な表情で言った。

「もう四年。本当に可哀想。よく耐えていると思う。もともとは農業国だそうだけれど、きっときちんと生産できなくて、食べ物も不自由だろう。夜も眠れないだろう。皆、かなり疲弊しているはず。容易に想像がつく。死ぬも地獄、生きるも地獄だと思う。」

その言葉を聞き、私は同じニュースを見ても「四年」という数字だけの理解しかできていない自分に気づいた。そして、もし今日の世界の指導者達も、祖母ではなく私と同じような理解にとどまっているとしたら……と、言葉にならないほどの恐ろしさを感じた。

そして祖母は、続けた。

「つらい状況が長く続くと、大人も子どもも、正義では行動できなくなる。戦争は、人の心まで蝕んでいく。平和なときなら親切な人でも、人を欺いたり、陥れたり。子どもにも、子どもらしさがなくなっていく。戦争は、長引いたら傷が大きく、深くなる。物資も精神も取り返しのつかない傷になる。だから、一刻でも早く終わるといい。その手助けに、当事者以外の人達が声を上げることが大切。戦争をしている国が、戦争をすることの方が自分たちの損が多いことに気づくように、戦争をすることは自分の国のためにならないことを理解できるように、第三者的な立場から働きかけることが大切だと思う。」

私はこの夏、日本に留学中の大学生達との国際交流に参加した。私達の中学校へ来てもらい、日本の学校生活を紹介し、一緒に楽しい時間を過ごした。私は、英語だけでなく、独学で覚え始めた韓国語でも話しかけてみた。本当に使える言葉なのか不安だったが、言葉も心も通じ合い、本当に嬉しく、感動した。その体験を祖母に報告すると、祖母と一緒に喜んでくれ、こう言った。

「今後、もしその人のいる国と戦争が起こりそうになったら、『一緒に笑い合ったあの人のいる国だ。優しくったあの人はどうしているだろう』と、必ず躊躇が生まれると思う。それが踏みとどまるということ。お互いに理解することが、相手を痛めつけないための基本だと思う。」

祖母が私へ語ってくれたことには、「国連」という言葉は直接的には含まれていない。しかし、戦争を早く終わらせる手助けとして当事者以外の人達が声を上げることの重要性、戦争を踏みとどまるために世界の人々が友好関係を築くことの重要性は、国連の目的とそのまま重なる。

この八十一年間、もし国連がなかったら世界はどうなっていただろう。紛争解決のための対話、国々の独立、人道支援、核兵器廃絶の努力、そのための友好関係の構築、そのどれもが紛れもなく大きな功績だ。「正しい戦争」や「必要な戦争」はない。第二次世界大戦の痛みを自らの経験として語ってもらえる最後の時代の今こそ、国連創設当時の世界の記憶とともに世界平和を守り続けるために、これからも国連は必要であり続けると考える。